美女と野獣と魔女

伊東歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
美女と野獣と魔女

【Ｎコード】
Ｎ８１３２Ｌ

【作者名】
伊東歩

【あらすじ】
森の奥にひっそりと生きる野獣。近隣の村人はその存在を恐れ日々の貢ぎ物を欠かしません。しかし村も裕福でなく、貢ぎ物を止めようかとの相談をする。そんなある日、一人の娘が名乗りを上げる。自らが森に赴き野獣と対峙すると言うのだった。

誰一人立ち入ることのない深い深い森の奥。一軒の小さな小屋が建っていました。そこに住んでいたのは一目見たら決して忘れることのできない醜くとても恐ろしい野獣。村人はその野獣を大変怖がり、彼の言うがままに食べ物を貢いでいました。

ある日、いつものように野獣は森から出てきました。と言っても村まで降りることはありません。すでに村人が森の入り口に貢ぎものを置いているからです。そのお陰で村人はあの恐ろしく醜い姿を見ずに済んでいました。野獣はその貢ぎものを手に取ると再び森の奥深くへと帰っていきます。そして、小屋に帰り一人寂しくそれを食べました。

（どれくらい人と話していないだろう？）

野獣はため息をつきました。もう何年も誰とも会話をしていません。森の動物でさえ彼の姿を怖がり近寄ろうとしないのです。野獣は食事を終え、いつものように歌を歌いはじめました。彼の歌声は野太く、そしてしゃがれていてとても歌とは思えない代物でした。歌というより唸り声のようです。しかし彼はそれをやめようとはしませんでした。それをやめてしまえば自分が声を出す機会がまったくなくなってしまいます。野獣は目を閉じ、昔を思い出しながら一生懸命歌いました。その声は悲しく森に響きました。

村人たちは皆深刻そうな顔を突き合わせてなにやら話し合いをしています。

「もうあの野獣の姿を何年も見とらん。もう貢ぎものなんぞせんでもいいのではないか？このままじゃおらたちの食う物がなくなっちまう。」

「しかし毎日ちゃんとなくなっとる。あのバケモンはまだあの森にいるはずだ。」

「でもそれは動物が食べとるんかもしれんだろ。」
「だが貢ぎものをやめてそのせいで村に入ってきたらどうする？もうわしはあんな姿を拝みとうないぞ。」
村人たちは一様に唸り声をあげ黙ってしまいました。そのときです。村人の一人がすっと手を上げました。村一番の美女、アンナです。
「私が見てきます。」
皆ギョッとしてアンナを見ました。
「な、何バカなことを言ってるんだ。」
「そうだ、そんなことしてもし襲われたらどうするんだ。」
当然その場の全員が猛反対しました。しかしアンナは引き下がりません。
「毎日毎日あの野獣に貢ぎつづけたらこの村は潰れてしまう。みんなだって食べ物がなくて大変でしょう。何かあれば私が命をかけて村を守ります。ただ、私が帰って来るまでは貢物は続けてください」
アンナの目は力強い光を纏っていました。みなそれ以上何も言えず、結局アンナの案をとるしか手はありませんでした。

次の日。何も知らない野獣はいつものように森から出てきました。そして我が目を疑いました。いつも食べ物が置いてある場所にそれはなく、代わりにきれいな女の人がいるではありませんか。とっさに身を隠しました。
（人間だ。どれくらいぶりに見ただろう。）
野獣はそばに行って声をかけたい衝動に駆られました。しかしそんなことをしたらきっと彼女は恐怖で逃げ出すに決まっています。野獣はこっそりその場を後にして森に帰ることにしました。
小屋に帰り、一人ぼーっつ先ほどの女の人のことを思い出していました。
（とても綺麗な人だった。もう一度近くで見てみたいものだ。）
そんなことを考えていると、小屋の扉をコンコン、と叩く音がし

ました。ここに来客など信じられません。迷い込んだ動物か、それとも風で何かが飛ばされたのか。とりあえず確認のために扉を開けました。

「あっ！」

自分でも信じられないくらい大きな声を出してしまいました。なぜならそこにいたのは先ほど森の入り口で見たあの美女だったからです。

「こんにちは、野獣さん。私の名前はアンナです。」

アンナは野獣の姿にまったく驚いた様子も見せず淡々と自己紹介をしました。

「な、なぜこんなところへ？」

歌以外の言葉を口にするのは何年振りでしょう。

「あなたにお願いがあるんです。私を、お嫁さんにもらってくれませんか？」

あまりに突然のことに声も出ません。しばらくアンナの顔をじっと見つめ続けていました。

「その代わり、食べ物を要求しないでくれ。そういうことかい？」

「いえ、食べ物は今までどおり差し上げます。そうしないとお腹が空いてしまうでしょう。」

アンナの笑顔は野獣の心に久々の潤いを与えました。

それから数日が経ちました。二人は少しずつですが親しくなっていきました。

「つまり、あなたはもともとは人間だったということなんですね。」

「そう。魔女の呪いのせいでこんな姿になってしまったんだ。」

野獣はいきさつを話しました。自分はもともと貴族の出身であること。父の代での因縁のせいで魔女に呪いをかけられたこと。行く当てを失いようやくこの場所にたどり着いたこと。

「本当は村の人たちに食べ物をもらっている代わりに何かしてあげたいんだ。でもこの姿じゃ人前に出られないし、何もできない。」

気付くと野獣は涙を流していました。アンナはそれを見てやさしく言いました。
「今まで独りでさぞ寂しかったでしょう。でもこれからは私がついています。」
二人はじっと見つめあいました。そして、自然に唇同士が近づいていきました。
唇が触れ合った瞬間、まばゆい光が二人を包みました。そしてその光が納まるころには、そこに野獣の姿はありませんでした。代わりに、整った顔立ちの青年がいました。魔女の呪いが解けたのです。
「なんということだ！人間に戻れた！」
二人は手を取り合って喜びました。その時です。
「ふぇっふぇっふぇ。」
どこからか不気味な笑い声が聞こえてきました。野獣だった青年ジェーンはすぐにその正体が分かりました。
「魔女だな。どこだ、出て来い！」
小屋の隅に立てかけておいた剣に手を伸ばしました。それとほぼ同時に魔女も姿を現しました。
「人間に戻れたようじゃな。しからばもう一度魔法をかけてやるまでじゃ。」
「そうはさせるか！」
鞘から剣を抜き取ります。それはよほど手入れが行き届いているらしくまばゆいほどの光を放っています。
「待って。」ジェーンが足を踏み出そうとしたとき、アンナが割って入りました。
「邪魔をしないでくれ。」
ジェーンはアンナを振りほどこうとしますが簡単にはいきません。
「そうやって恨みの連鎖を繋げてどうするんですか。ここで断ち切らないと。」
「そんなこと言ったって・・」
言い合う二人を見ながら、魔女はふとあることを思いつきました。

「お前さんがた、よほど愛し合っていると見えるね。」
「だったら何だと言うんだ？」
「あたしゃそういうのが大嫌いでね。ほい。」
右手の杖を振りかざし呪文を唱えました。するとどうでしょう。アンナの皮膚がまるでゼリーのようにどろどろになってしまったではありませんか。あの美しいアンナが見る影もありません。
「そんな姿でも愛せるかい？」
魔女はジェーンに言いました。にやにやと気味の悪い笑顔を浮かべています。
「バカにするな。どんな姿になったってアンナはアンナだ。」
手を伸ばし肩に触れます。その瞬間、激痛が走りました。肩に触れた手からは湯気のようなものが立っています。
「ふぇっふぇっふぇ。それはただのどろどろ皮膚じゃあないよ。硫酸の皮膚さ。」
魔女は高笑いを続けます。ジェーンはしばらく魔女を睨み付けていましたが、意を決して叫びました。
「見ていろ。これが僕の愛の深さだ！」
そう叫ぶなり手に持っていた剣を床に突き刺し、アンナに抱きついたのです。
「なんてことを！」
アンナはジェーンを引き離そうとしますがうまくいきません。たちまち全身から湯気が立ち、血が滴り始めました。やがて、諦めたのかアンナもジェーンをしっかりと抱きしめました。
「ぐあぁぁっ！」
数分と経たないうちに、ジェーンは跡形もなくなってしまいました。魔女はにやりとして言いました。
「どうだい、悔しいだろう。ふぇっふぇっふぇ。」
「そんなことないわ。」
「なにい？」
不思議そうな顔をする魔女にアンナは言いました。

「この人は自分の命を賭してまで私に愛を伝えてくれた。そんな強い愛を受けられて私は幸せです。」
魔女の顔が見る見る怒りに変わっていきます。
「まあだ愛だの何だのと言うのかい。」
悔しそうに肩を震わせていましたが、やがて何かを思いついたらしく、またあの不気味な笑い声をあげました。
「そうかいそうかい、それはさぞ嬉しかったろうねえ。あんたは一生その愛を忘れずに生きていかなきゃねえ。」
「もちろんです。」
「よく言った。じゃあそんなあんたにはこれだよ！」
魔女は再び杖を振りかざしました。するとどうでしょう。アンナの体があのどろどろではなくもとの美しい姿に戻ったではありませんか。いえ、今まで以上の美しさです。
「あんたは世界で一番美しい女になった。世界中の男どもが寄ってくるだろう。それでも今受けた愛を忘れずにいれるかえ？ふぇっふぇっふぇ。」
魔女は得意げです。してやったりといったところでしょうか。
「世界で一番美しく？それは大変。」
アンナは困惑の表情を浮かべています。それを見て魔女は更に笑い声をあげました。
「そうさ。あんたはその美貌がありながら命がけの愛に縛られたまま生きていくのさ。」
「そう。でも・・」
アンナはジェーンが突き立てた剣を引き抜きました。ゆっくりと歩み寄ります。
「何をする気だい？」
「でももし顔に傷がついていたら、誰も寄り付かなくなるんじゃない？」
刃先を自分の顔に近づけました。
「そんなことさせるもんかい。あたしの魔法で、あんたの体はどん

なことがあっても傷つかないようになったのさ。」
「そう・・・それを聞いて安心したわ。」
魔女ははっとしました。アンナの表情が、今までの清楚なそれと違って、悪魔的な笑みに変わったのです。一瞬でした。魔女が魔法を使う間もなく、あっというまに右手が剣によって切断されてしまいました。
「あああっ。」
床に倒れる魔女。アンナはその体を踏みつけ、上から見下ろして笑っています。
「まさか、最初からこれが狙いだったのかい？」
「いち町娘が最高の地位を手にするためにはこれくらいの美貌がないとねえ。」
剣が振り上げられました。それが魔女が見た最後の映像でした。

数ヵ月後、大陸一の権力を持つ大帝国の王子が妻をめとりました。その妻の容姿はまるで神がかりのように美しく、みなを魅了してやみませんでした。貴族は貴族と、町人は町人と結婚するのが当たり前のこの時世に、一国の王子と町娘というのは実に珍しく、衝撃的なものでした。女のあまりの美しさに王子は完全に虜になってしまったのです。
「まことにそなたは美しいのう。なにか秘訣でもあるのかえ？」
「ありがとうございます。秘訣ですか？そうですね、私は美貌のためにはどんなことでもやってみせる、それくらいの覚悟ですかね。」
そう言って女は微笑みました。その奥に秘められた真実を誰も知る由もありませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8132l/

美女と野獣と魔女

2010年10月8日14時46分発行